

Jūn zǐ zhī dé fēng
君子之徳風

(君子の徳は風なり) 〈学顔淵第十二〉

うえだ あつお
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

孔子は魯の国で昭公、定公という二代の君主に仕えましたが、兩人ともすでに実権を失い、現に国政を牛耳っていたのは孟孫氏、叔孫氏、季孫氏という三家の貴族でした。中でも最も強い勢力を誇っていたのは季孫氏で、この季孫氏一族の当主が季康子です。

貴族が実権を握って君主をないがしろにするとすることは、孔子の政治理念からすると、最も許しがたいことでした。この三家を排除し、国政を本来の姿に戻すことを、孔子は何度か試みましたが、なかなかうまくいきません。そこで、最も強い権力を握っている季康子に直接自省を促すことで、国政改革の実を挙げようとなりました。一方、季康子は、内外に人望の厚い孔子を味方に引き入れることで、貴族間での優位性を保とうと、もくろんでいました。

そういう関係の中で交わされたのが次の対話です。

ある時、季康子が政治のやり方について孔子に問いかけました。「如杀无道，以就有道，何如？(Rú shā wú dào, yǐ jiù yǒu dào, hé rú?)」(如し無道を殺して、以て有道に就けば、何如ん)〈顔淵第十二〉。道義にそむく者を殺して、道義に厚いものだけを味方に付けたら、どうだろう、と。道義にそむく者を殺すとは、現代の常識から考えると、ずいぶん荒っぽい議論のようですが、戦乱の世を終わらせるための非常手段としては、誰しもが考えそうなことです。ましてや当時の権力者にとっては、常識として立派に通用する議論であったことと思われます。事あるごとに道義を振りかざす孔子を前にした季康子の、得意げな顔が目に浮かぶようです。しかし孔子の答えはこうでした。

「子为政，焉用杀？子欲善，而民善矣 (Zi wéi zhèng, yān yòng shā? Zi yù shàn, ér mǐn shàn

yǐ) (子政を為すに、焉んぞ殺を用いん。子善を欲すれば、民善ならん)。閣下が政をなさる上で、どうして人を殺す必要がありましょう。閣下が善人であることをお望みなら、民もそれを見倣って善人となることでしょう。

季氏一族の専横ぶりは、当時、誰の目にも明らかでした。いわば乱世の張本人とも言うべき季康子が、「無道を殺して、有道に就く」などと嘯くのは、孔子からすれば笑止の沙汰であったはずですが、しかしそのことはおくびにも出しません。人を殺す前に、権力者の貴殿こそが率先して善人となるべきですよ、そうすれば民も善人になりますよと、正論から攻めます。そして次のように締めくくります。

「君子之徳風。小人之徳草。草尚之風，必偃。(Jūn zǐ zhī dé fēng. Xiǎo rén zhī dé cǎo. Cǎo shàng zhī fēng, bì yǎn)」(君子の徳は風なり、小人の徳は草なり。草之に風を尚うれば、必ず偃す)。君子の徳は風のようなものです。小人の徳は草のようなものです。草に風が加われば、必ず靡きますよ、と。この場合の「君子」とは一国の指導者を指します。そして「小人」とは一般民衆を指します。

政治の目的は、民を幸せにすること。人を殺す政治などあり得ない。これが孔子の主張の基本でした。そしてこれを実現できる最低条件は、指導者が善人であるかどうかにかかっているということです。

さてこの忠言を季康子が理解できたかどうか。その後の推移を見ると、否と言わざるを得ません。しかし孔子の教えを後世に伝える上で、季康子は少なくとも一定の役割を果たしたとは言えるでしょう。